# 新しい教師教育の可能性

## 異校種・他大学との交流を通して

津田　ひろみ（元明治大学、現神奈川大学・武蔵大学）

### 1．はじめに

国際日本学部では、自律した学習者の育成を目指して「コミュニケーション」の一形態である協働学習を授業に取り入れ、問題を多角的に捉え深く考える活動を重視してきた。すでに、教室での協働学習は広く行われていることと思う。そこで、新たな教師教育の道を探ってみた。

ひとつの試みとして、昨年度より神奈川県の M 中学校と協働し、夏休みと冬休みの前に複数の大学の学生たちによる出前授業を行っている。昨年度は本学と T 女子大学の学生さんの有志が中学 2 年生の補習授業に参加し、今年度は本学 3 年生と M 大学の院生さんが中学 3 年生の補習授業に挑戦した。指導案の作成から当日の運営まで学生自身が協働で取り組んだ本活動は、学生たちにとっても中学生にとっても満足の得られる結果をもたらした。当日の発表ではその様子とアンケート結果を学生達の声も交えて発表した。

この活動を発端に、学年・学部、さらに大学や校種の壁をも越えて協働する「教職勉強会」を立ち上げた。その活動を契機に新しい教師教育の可能性を模索したいと思う。

### 2. これまでの協働学習を取入れた教職課程の授業の特色

#### 2.1 国際日本学部「英語科教育法」「授業デザイン論」

(1) 模擬授業

希望の学年により 4～6 名のグループを作り、取り上げるユニットや指導内容についてはグループで相談させた。グループによっては ALT の役割を決めて TT の授業を行ったが、全員が必ず教壇に立つことを原則とした。

授業後は数名が授業についてコメントし、教員も最後にコメントした。全員がコメント用紙に気づいたことをメモし、本人に渡した。

(2) 教育に関する新聞記事についての討論

ほとんどの学生が新聞を読んでいないことを知り、少なくとも教育に関する世の中の動きに関心を持ってほしいと思い、この活動を始めた。

「英語科教育法」では、担当の学生が選んだ新聞記事を前もってオンライン配布し、担当者は 2 つほどの論点を指定しておく。10 分ほどグループで討論した後、グループの代表者が討論の要旨を発表し、他のグループと意見を述べ合った。

「英語授業デザイン論」では、興味のあるトピックを選んでグループを作り、問題点を分担して調査し、パワーポイントでデータを示したり、クラスで討論するなど、それぞれの方法で発表した。全員が何らかの役割を持ち発表するよう工夫してもらった。

どちらも時間はかかったが、社会問題に関心を持ち、自分事として深く考える契機になっ

たと思われる。

### 2.2 武蔵大学の模擬授業のクラスの特色

学期始めに指導案・ハンドアウト・教科書の抜粋を提出させる。前期は 4 年生、後期は 3 年生全員がひとりずつ 20 分程の模擬授業を行う。学生は、模擬授業の前に指導員によって個別に事前指導（25 分程度）を受ける。1 回の授業で 3 名が模擬授業を行う。授業者は授業後に自らの授業についてコメントし、その後、学生同士による討議が行われる。担当教員、指導員もコメントする。全員が「コメント用紙」の項目ごとにコメントを書いて授業者に提出する。模擬授業後には、指導員が個別に「事後指導」を行う。

### 2.3 両校の比較

本学と大きく異なる点は以下の 4 点である。

1）指導員による個別指導（事前指導は 25 分～40 分程度、事後指導は 15 分～20 分程度）があり、模擬授業の準備に力を入れている。

2）学期に 4 回ほど 3，4 年生合同の授業があり、毎回 3 年生数名が模擬授業を行う。出席者がコメントし（4 年生は必修授業）、全員がコメント用紙を提出する。さらに、2 回ほど外部の教師を呼んでコメントしていただく。

3）教科を超えて協力して学習できる教職準備室（学生が管理）があり、全科目の新旧の教科書がそろっていて自由に閲覧できる。

4）MSC（Musashi School Supporter Club）という地域のボランティア活動に自由に参加することができる。

4 点の中でも特に、学科を超えて集まることのできる準備室の効果が大きいことは間違いない。また、異学年が互いに模擬授業を参観しコメントできるのは学生にとって非常に学びが大きいと思われる。しかし、3、4 年生の繋がりはあまり強くなく、コメントにも気を遣っているのが現実のようで、その点については今後、工夫が必要であると思う。

## 3. 新しい協働：校種を超えた協働実践の例

### 3.1 近隣の小学校との協働実践

初等科教育（英語）を受講する大学生（3 年生）は近隣の小学校で、また本学英語科教育法の学生さんは区内の小学校で 5 年生を指導した。iEARN（International Education And Resource Network 国際協働教育）に加入し、海外の小学生との交流を図った。iEARN とは、ICT と教師のネットワークを活用して世界各国で国際交流学習を推進することを目的とする NPO 法人で、17 歳以下の子どもを対象としているが、大学生はその子どもたちの補佐役として活動することができる。

主な活動としては、Holiday Card Exchange Project（クリスマス・カードの交換）が挙げられる。生徒にとってカードの文字を書くのはかなり難しかったと思われるが、飾り付けは楽しんでいた。さらに、海外からカードが届いた時はどの児童も大喜びで、自分のカード

が海の向こうに届いたことや知らない国から届いたカードに “Dear friend” と書かれていることに感動していた。

その他、互いの国の小さなおもちゃやお菓子、文化を示すものを交換する Culture Exchange Project も台湾の小学校と行った。また、Teddy Bear Exchange Project といって、送られてきたテディベアに校内を案内して写真を撮り、担任教師が短いキャプションをつけ、校歌を BGM として流して交換したこともあった。

主な指導は大学生が行い、教員は英語の確認と特別指導の必要な児童に関わるにとどめた。どのようにしたら児童に英語を書こうと思ってもらえるか、学生たちが考え、試行錯誤を繰り返しながら 6 回ほどの授業でカードを仕上げさせた。

＜台湾からのカード＞　　＜Teddy Bear Project で送った写真の例＞

### 3.2 中学校・高校との協働実践

英語科教育法の学生さんが中学校 2、3 年生の補習授業を担当し英語が嫌いな中学生たちに不定詞、接続詞、関係詞を教えた（夏休み前と冬休み前）。

（1）当初、T 女子大生と本学の学生が協働して活動に参加する予定だったが日程の関係で本学の学生 3 年生（英語科教育法）2 名のみが参加して「不定詞」の習得が完全でない生徒の指名補習を受け持った。英語が不得意な生徒をどのようにして授業に惹きつけるか担当者が話し合った末、不定詞の文を「上の句」「下の句」に分けた Karuta Game を行った。

| 上の句 | 下の句 |
|---|---|
| Ellen visited Kyoto | to walk his dog. |
| Shinji went to the river | to fish. |
| Hiroshi gets up early | to see Kinkakuji Temple. |

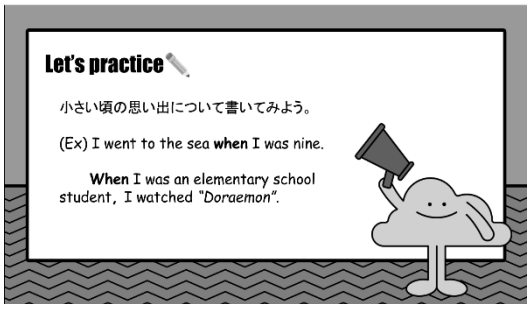
こうしたペアを 15 組みほど準備し、4 人グループの机に配布した。順番に上の句をめくり、当てはまる下の句をみつけて声に出して読めたら次の人にバトンタッチする。グループ対抗だったため、メンバー同士で助け合って解答をみつけようと頑張る生徒の姿が見られた。

（2）冬休み直前の補習クラスでは「接続詞」を扱った。中学校からは多くの接続詞が示されたが、学生達で相談し、when と if に絞って補習授業を行った。

英語が苦手な生徒に少しでも関心を持ってもらおうと参加学生同士で相談し、スライドや例文に工夫した。最後の確認テストはプリントでなく、グループで参加する Kahoot!を利用

し、生徒たちがグループで協力して解答する方法を取った。

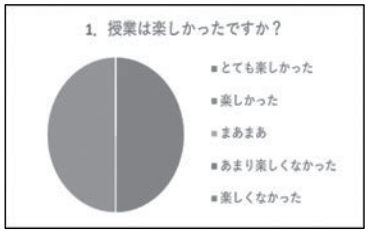
＜学生が準備したスライドの例＞　　＜Kahoot の例＞

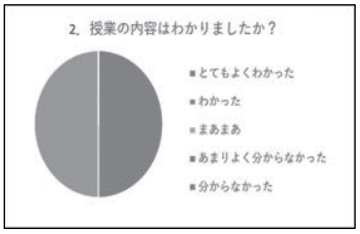


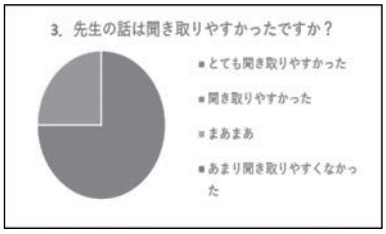
(3) 高校での補習授業（英検対策）

自分で英文を作れる自信をつけることを目的に、第一部 speaking、第二部 writing（2 級と準 2 級に分かれて指導）として、生徒を 3 人くらいのグループに分けて行った。グループの代表が教師のところで「絵」を覚え、グループに戻って覚えた「絵」を英語で説明する。他のメンバーは英語の説明を聞いて「絵」を描く、というゲームだった。次のゲームに勝つためにグループ内でアドバイスしたり、戦略を話し合ったりした。何度も繰り返すことによって生徒全員が英語で説明する体験を重ねながら学習した。

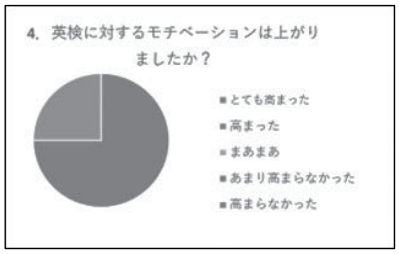
授業に対するアンケートの結果は以下のように、学生の授業に肯定的であった。




さらに、生徒の動機づけについても以下のようなプラスの結果が得られた。




(4) 学生による補習授業を受講した中学生の感想

・とてもわかりやすかった

・ゲームなどを入れて教えてくださり楽しかった

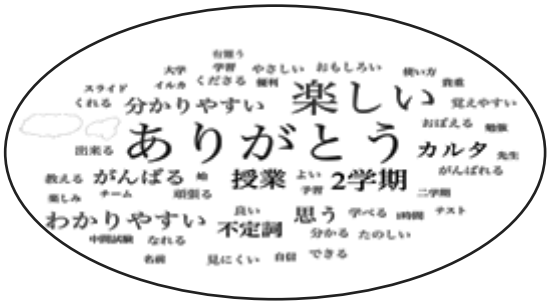
・現役の方から話を聞ける貴重な経験だった

・英検を頑張ろうと思えた

などの意見が聞かれた。

以下に主な感想のテキストマイニング分析の結果を示す。一見して明らかなように、扱ったトピックの次ぎに「楽しい」「わかりやすい」「ありがとう」「グループワーク」「kahoot」

などこちらが目指していたワードが並んでいる。さらに、「がんばる」「深まる」などのワードが見られるのも嬉しい。



### 3.3 異校種間の協働実践について「まとめ」

上記のように、中学生も高校生もポイントを楽しく理解したようである。また、グループワークや Kahoot!などののアクティビティの楽しさにも多くの生徒が注目していたことがわかる。「2 学期」というワードも見られるが、これは当該校が 2 学期制であるため、後期を意味する。高校生の英検に対する動機づけ同様、英語学習に対する前向きな姿勢が少しでも窺えたのは参加した学生にとって大きな自信になったと思われる。

2 大学の協働実践については 2 回ともうまく行かない部分があり、当日に慌てた場面も見受けられた。その原因は協働の準備時間の不足、および活動に対する参加学生の熱量の違いにあったようだ。

模擬授業の前に教壇に立つ経験ができたことは学生にとってかけがえのない経験になったことを全員が指摘していた。一方、生徒たちも年齢の近い大学生ということで親しみを感じ、楽しい授業に積極的に参加し理解が進んだだけでなく、英語に対する意欲や関心も高まり、互いにとって win-win の関係であったと言えよう。こうした経験をさせていただける学校はなかなかないと思うが、せめて、授業参観だけでもご協力くださる初等科・中等科の学校が何校かみつかることを願っている。

教師が忙しくて小中、あるいは中高など異校種間の連携を取る時間を確保することが難しいのが現状ならば、その前の段階、教職課程に在籍する大学生が小中高の学習の様子を知っておくことは後々彼らが教員になった際には彼らの大きな助けになるだろう。

以上が異校種間の協働実践の成果の報告である。

## 4. 新しい教師教育の提案

### 4.1 大学の壁を越えた「教職勉強会」の発足

いきなり異校種間の協働実践を始めようとしても容易ではないことは承知している。ちょうど筆者は本学を 3 月で定年退職したが、その際、教職課程で受け持った学生数名から「勉強会を立ち上げてほしい」という要望があった。幸いにも 4 月以降も都内 M 大学で「模擬授業」という教職課程の科目を担当させていただくことになった。そこで、2 つの大学の有志を募って勉強会を立ち上げた。本学の数名の先生方のご協力も得て、国際日本学部、総

合数理学部、経営学部、文学部、そしてM大学の人文学部英米文化学科、人文学部ヨーロッパ文化学科、さらに、以前本学で筆者の授業の受講生で現在は高校教員になっている卒業生が集まってくれた。当初、20名弱だったグループLINE登録者数は先日の発表を期に30名に増えた。とはいえ、月2回の勉強会への定期的な参加者は7名～8名程度である。

9月にスタートしてから暫くの間は、お互いの紹介をしたり、悩んでいることを語り合ったり、教育に関連のある新聞記事について意見を出し合ったり、緩やかな集まりだった。しかし、文系理系の学生はやはり気がつく視点が異なるため、互いの意見を聞きながら、視野を深め、問題点をより深く考える機会を得られるのが楽しい。

4ヶ月ほどたった頃、勉強会後に忘年会を兼ねて食事をしたことを契機に、年明けから急速にラポールの形成が進んだように感じている。やはり、協働学習だけでなく、協働的活動にも参加者間のラポールは重要な鍵となることを実感した。

### 4.2 今後の展望

目標がないことが参加者の意欲の高まりを妨げているのではないかと考え、3月にグループで発表することにした。筆者はこの勉強会の紹介だけにとどめ、司会からまとめ役まですべて学生に任せる。発表内容についても、これまでに話し合ったことを参考に各自で考えてまとめ、それを参加者間で共有しながら準備を進めることになった。まさに、大学や専攻を超えた仲間の協働的な活動が進行している。

さらに、発表の後の将来に向けたプロジェクト企画も進んでいる。参加者およびグループLINEメンバーが自由に発言し、疑問を呈し、自分にできる部分で参加していく。誰も強制したわけではなく、それぞれが期待感を持って参加している。これこそが協働学習（活動）のあるべき姿ではないだろうか。

この活動が未来の教員に何らかの良い影響を与え、それを将来、彼らが教育の現場に立った時、そこに還元してくれることを祈念しながら、体力の続く限り、この活動を続けていきたいと考えている。